

主要地方道千葉竜ヶ崎線 埋蔵文化財調査報告書

-印西市東泉新田南遺跡-

平成16年3月

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道千葉竜ヶ崎線 埋蔵文化財調査報告書

いんざい ひがしいずみしんでんみなみ
－印西市東泉新田南遺跡－



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第494集として、千葉県企業庁の主要地方道千葉竜ヶ崎線建設事業に伴って実施した印西市東泉新田南遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の焼土跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水 新次

凡　　例

- 1 本書は、千葉県企業庁による主要地方道千葉竜ヶ崎線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

東泉新田南遺跡 千葉県印西市草深字天王脇1119-25ほか（遺跡コード231-016）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、I-1を副所長岡田誠造が、II-2を研究員小笠原永隆が、II-3(2)を研究員立和名明美が行い、その他の執筆及び編集は上席研究員矢本節朗が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県企業庁ニュータウン整備部、印西市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「白井」(NI-54-19-14-3)
第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「小林」(NI-54-19-14-1)

- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による1969（昭和42）年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。座標系は日本測地座標系を用いている。

本文目次

Iはじめ	1
1 調査の概要	1
(1) 調査の経緯と経過	1
(2) 調査の方法	1
2 遺跡の位置と周辺遺跡	2
II 遺構と遺物	5
1 旧石器時代	5
2 縄文時代	8
3 中・近世	9
(1) 遺構	9
(2) 遺物	10
IIIまとめ	12
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 確認調査範囲・遺構配置	2	第6図 縄文土器	8
第2図 調査範囲と周辺地形	3	第7図 S K002	9
第3図 周辺遺跡	4	第8図 S D001	10
第4図 旧石器時代焼土跡・単独出土1~3	6	第9図 近世遺物	11
第5図 旧石器時代石器	7		

表目次

第1表 旧石器時代石器属性表	8
----------------	---

図版目次

図版1 東泉新田南遺跡の周辺地形	図版3 旧石器時代石器
図版2 単独出土1	図版4 縄文土器
基本土層・旧石器時代焼土跡	陶磁器
単独出土2・単独出土3	鉄製品
S K002・S D001	青銅製品・土製品・錢貨

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、千葉ニュータウン地域内の道路網の整備を目的として主要地方道千葉竜ヶ崎線道路改良事業を計画した。事業地区内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育委員会と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査及び整理作業は財団法人千葉県文化財センターが実施することになり、発掘調査は平成14年・平成15年度に実施した。当初、遺跡南側に延びる土手を野馬土手と考え調査を行ったが、精査の結果、現代の耕地造成による地境の土手であることが判明した。その後、上層については調査対象面積の10%，下層については調査対象面積の4%の面積を基本として確認調査を実施した結果、旧石器時代の焼土跡、旧石器時代石器、縄文土器、中・近世の溝1条、土坑1基や近世陶器・錢貨などの遺構・遺物が検出されたが、遺構・遺物等の広がりが認められず確認調査で調査は終了した。整理作業は平成14年度及び平成15年度に実施した。各年度の実施期間・担当者及び作業内容は以下のとおりである。

平成14年度

(発掘調査) 期 間 平成14年9月2日～10月15日、平成15年3月3日～3月26日

　　北部調査事務所長 古内 茂

　　担 当 上席研究員 安川正行・矢本節朗

　　研 究 員 小笠原永隆

　　作業内容 上層確認調査 394m²/3,940m² 下層確認調査 112m²/3,940m² (9・10月)

　　上層確認調査 221m²/1,804m² 下層確認調査 161m²/1,804m² (3月)

(整理作業) 期 間 平成14年10月16日～10月31日

　　北部調査事務所長 古内 茂

　　担 当 研究員 小笠原永隆

　　作業内容 水洗・注記～原稿執筆の一部まで (平成14年度上半発掘調査分)

平成15年度

(発掘調査) 期 間 平成15年12月1日～12月11日

　　作業内容 上層確認調査 75m²/750.52m² 下層確認調査 32m²/750.52m²

(整理作業) 期 間 平成15年12月12日～12月26日

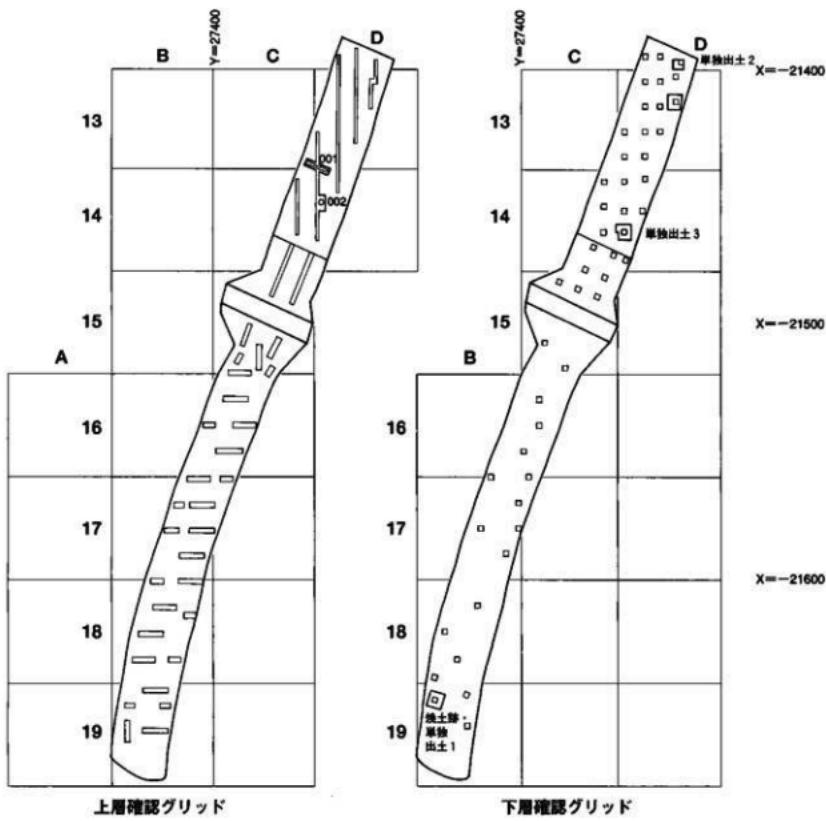
　　北部調査事務所長 古内 茂

　　担 当 上席研究員 谷鹿栄一

　　作業内容 水洗・注記～原稿執筆 (平成14年度下半調査分、平成15年度調査分)、原稿執筆の一部～原稿執筆、報告書刊行

(2) 調査の方法

遺跡の発掘区の設定は公共座標（日本測地系）を基準に40m×40m方眼を設定し大グリッドとした。大グリッドの呼称法は北西を起点として北から南に1, 2, 3, ……とし、西から東へA, B, C, ……と



第1図 確認調査範囲・遺構配置図

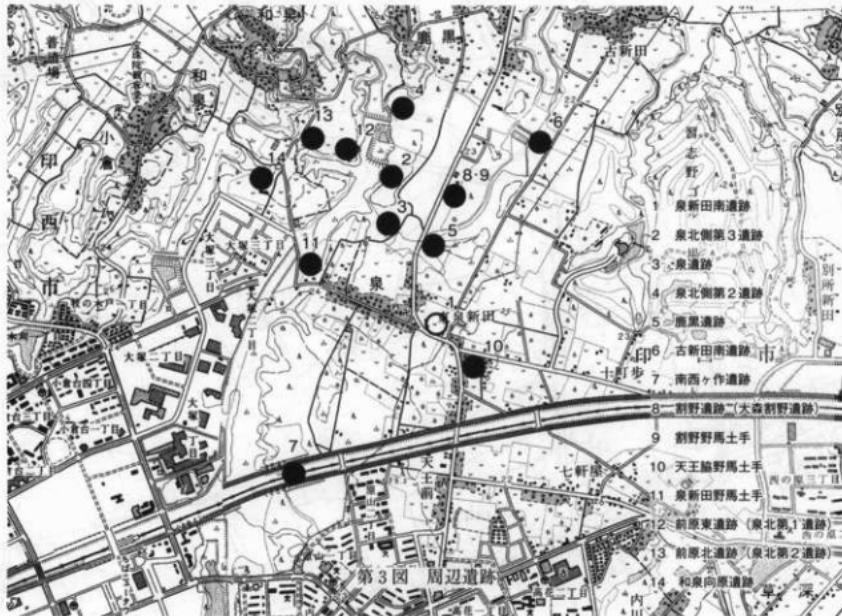
して、これを組み合わせて使用した。大グリッド内はさらに4m×4mの小グリッドに分割し北西隅を起点に西から東へ00, 01, 02……として、北から南へ00, 10, 20, ……とした(第1図)。

確認調査は上層は幅2m或いは幅1mのトレンチを基本に東西、南北方向へ入れて遺構の検出を行い、遺構検出部分については拡張し精査した。下層確認調査は10m×10mの割合に2m×2mのグリッドを設定し遺物の検出を行い、出土グリッドについては周囲を拡張し精査した。

2 遺跡の位置と周辺遺跡

東泉新田南遺跡は、印西市草深字東泉新田前・字天王脇に所在する遺跡である。遺跡は印西市中央部やや西寄りに位置し、近年の千葉ニュータウン造成に伴って遺跡周辺の環境は大きく変貌しつつある。今回調査した地点周辺の地形は、北西方面では鹿島、古新田から利根川へ注ぎ込む亀成川の支流に開析された幅50mほどの支谷が二条入り込んでおり、南西方向では印旛沼へ注ぐ神崎川の一主流によって開析された幅50mほどの支谷が入り込む地形になっている。調査地点はちょうど両支谷の最奥部にあたり、北流して利根川へ直接流入する小河川と西流して印旛沼に注ぎ、利根川へ流入する小河川の分水嶺周辺の東側台地





上に立地する（第2図）。

本遺跡の周辺では千葉ニュータウン内の遺跡をはじめ多くの遺跡の存在が知られ、本遺跡で出土している遺物に関係する時代を中心に紹介する。旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の北側には環状ブロックが検出された泉北側第3遺跡（新山南遺跡¹⁾）、細石器石器群が検出された泉遺跡²⁾、立川ロームIV層下部・V層の石器群がまとまって検出されている泉北側第2遺跡³⁾、ナイフ形石器が出土している鹿黒遺跡⁴⁾、古新田南遺跡がある。縄文時代の遺跡としては、泉遺跡で早期の撚糸文土器～後期の加曾利Bまでの土器がまとまって出土している。鹿黒遺跡では縄文前期～後期の土器が出土し、土製耳飾りも検出されている。泉北側第2遺跡では早期の炉穴が15基、前期・後期・晚期の住居跡9軒等が検出されている。遺跡の南側には南西ヶ作遺跡⁵⁾が存在し、早期の撚糸文系土器群が主体を占める。近世の遺跡としては、遺跡の北側で割野馬土手、南側で天王脇野馬土手、西側の支谷を挟んで泉新田馬土手があり、遺跡周辺の西側の小支谷を囲むように小金五牧の1つ「印西牧」に関係する牧の展開が考えられる（第3図）。

注

- 1 竹田良男 1999「泉北側第3遺跡」「平成10年度 千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨」千葉県文化財法人連絡協議会
- 2 橋本勝雄 1989『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX 泉遺跡(CN614)』(財)千葉県文化財センター
- 3 高橋博文 1991『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X 泉北側第2遺跡(CN613)』(財)千葉県文化財センター
- 4 橋本勝雄 1989『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX 鹿黒遺跡(CN615)』(財)千葉県文化財センター
- 5 高木博彦 1974『南西ヶ作遺跡(CN702)』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV』(財)千葉県文化財センター

II 遺構と遺物

1 旧石器時代

旧石器時代の調査は調査対象面積の全域で行われ、4地点で石器が検出され周囲を拡張して調査が行われたが遺物の集中、広がりが認められず確認調査で終了となった。1か所の拡張区で人為的な焼土跡と考えられる遺構が検出されている。これらの4か所の出土地点の内、1か所については重機掘削による確認調査のため明確な出土地点が不明であるが、他の3地点について単独出土1~3とし、クラムシェル調査出土の旧石器時代石器と上層出土の旧石器時代石器をその他の旧石器時代石器として報告する。

(1) 焼土跡（第1・4図、図版2）

調査区南端の単独出土1で検出された遺構である。19区北西隅に位置しており調査区をのせる台地の奥まった部分の平坦面に当たる。現況では立川ローム層の堆積は水平に堆積している。19B11区に位置する。形状は不整規円形を呈し、長軸方向の一端が突出して断面は皿状になる。人為的な掘り込みは認められず、ローム土が焼成され赤化している範囲（中央網掛け範囲）と焼土粒子が散布している範囲（周辺白抜き範囲）をもって焼土跡の範囲を認定した。焼土粒子が主体となるが、僅かに炭化物片も確認された。長軸方向はN-77°-Wを示す。長軸長は29cm、短軸は23cm、確認面からの深さは9cmを測る。焼土跡が確認された土層はXa層（X層上部）~Xb層にかけて分布し、土層断面の投影ではX層中部に投影される。単独出土1の石器の出土レベルより確認面のレベルで約18cm~20cm下位で検出されている。

(2) 単独出土石器（第4・5図、表1、図版2・3）

① 単独出土1

分布状況 調査区南端で1点が検出された。19B21区に分布する。周囲を拡張して精査したところ、遺物の広がりは確認されなかったが、前記した焼土跡が検出された。本遺物と焼土跡までの直線距離は約2.3mである。石器はX層中位~上位に使用痕のある剥片（以下、U剥片と略記する）が出土し、土層断面ではX層上位に投影される。

出土遺物 1はU剥片である。打面部及び左側面部が分割状に欠損する。石材は不透明で気泡の多い黒曜石である。右側縁全縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が陳らに認められる。

② 単独出土2

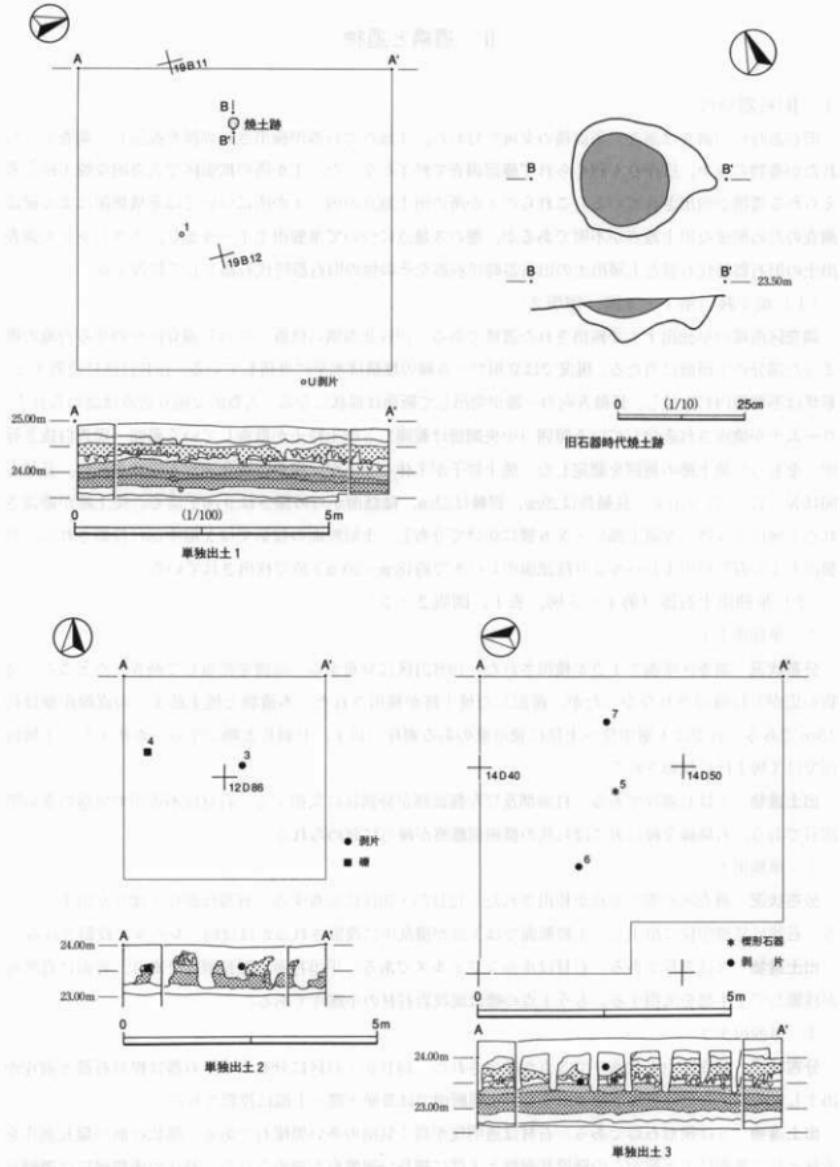
分布状況 調査区北端で2点が検出された。12D75・76区に分布する。石器は剥片と砾片が出土している。石器はⅢ層中位に出土し、土層断面では1点が攪乱中に投影されるがほぼ同一レベルに投影される。

出土遺物 3は剥片である。石材はホルンフェルスである。平坦打面の縦長剥片であり、背面に自然面が残置して下半部を欠損する。もう1点の砾は流紋岩石材の小砾片である。

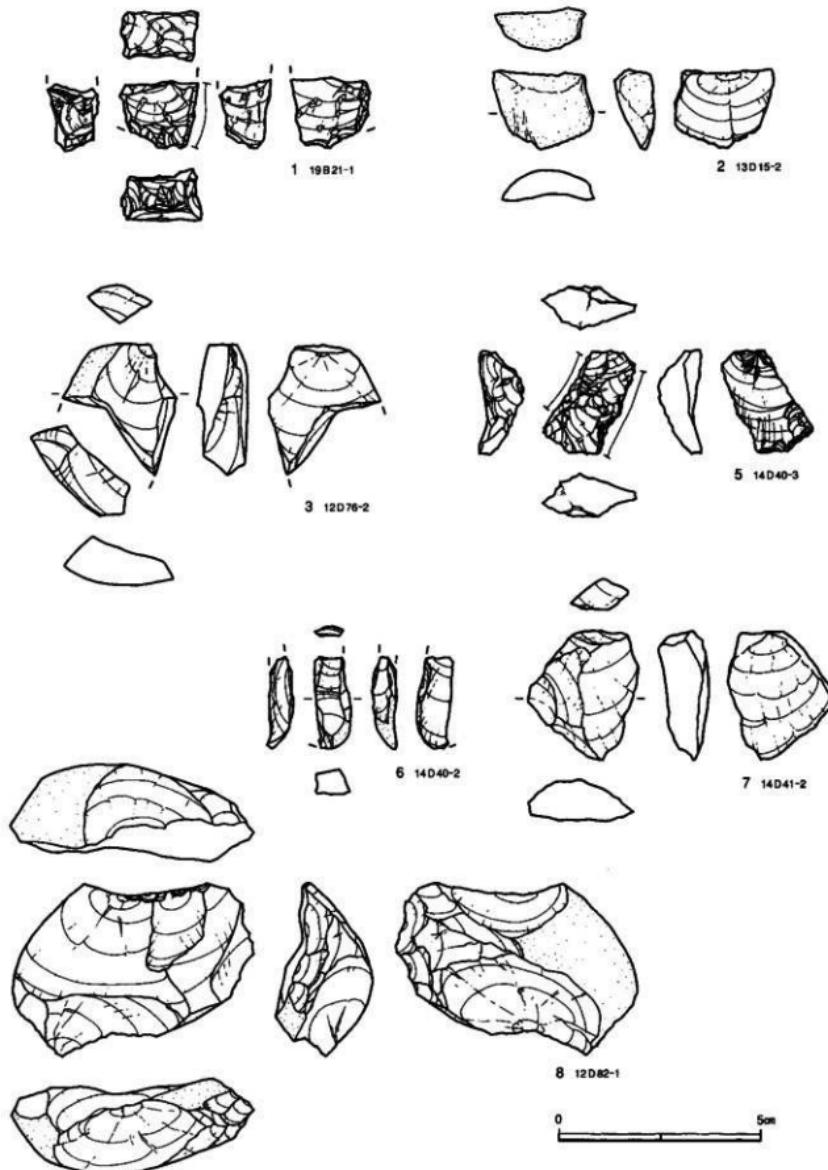
③ 単独出土3

分布状況 調査区中央北寄りで3点が検出された。14D40・41区に分布する。石器は楔形石器と剥片が出土している。石器はⅢ層下部で出土し、土層断面ではⅢ層下部~上部に投影される。

出土遺物 5は楔形石器である。石材は透明度が高く気泡の多い黒曜石である。線状打面の縦長剥片を素材として裏面に上下端からの階段状剥離と下部に細長い剥離痕が認められる。器体の両側縁には微細な剥離痕が連続する。6・7は剥片である。6はホルンフェルス製のもので、打面部から左側縁にかけて欠



第4図 旧石器時代焼土跡・単独出土



第5図 旧石器時代石器

損する。7は砂岩製のもので風化が著しいが、平坦打面の背面が多方向の剥離面で構成される縦長剥片である。

④ その他の旧石器時代石器

2はクラムシェル調査で検出された剥片である。調査時での所見ではⅧ層から出土している。13D15区に分布する。安山岩A（黒色緻密質安山岩）を石材としている。背面は自然面で覆われ、打面部も自然面打面である。8は上層調査中に検出された石核である。石材は安山岩Aである。楕円窪を分割して石核素材として正面及び裏面で素材の短軸方向の上下縁からの幅広な剥片剥離が顕著である。さらに、裏面では素材長軸方向からの打面角度調整的な小剥片剥離が認められる。

第1表 旧石器時代石器属性表

番号	遺物番号	器種	母岩	博物館番号	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	打面形狀	打面 刃調整	打面 頭部 調整	背面構成						調整角 C	先端角 S	側面 頭部 部位 H	側面 頭部 部位 T	側面 頭部 部位 R	側面 頭部 部位 L	側面 頭部 部位 D	側面 頭部 部位 V				
												C	S	H	T	R	L	D	V										
1	19B21-0001	U 潜 片	黒 磨 石	1	12.70	20.20	17.00	4.21	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	R	M	F						
2	13D15-0002	調 片	安 山 岩 A	2	20.20	25.20	10.40	5.02	C	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	F						
3	12D26-0002	調 片	キトクフクシカ	3	31.60	27.70	12.40	8.56	1	-	-	○	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	M	-					
4	12D75-0002	縫	波 紋 岩	4	18.90	12.70	11.30	2.57	-	-	-	○	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
5	14D40-0003	圓 形 石 器	黒 磨 石	5	25.00	23.00	10.50	3.42	-	-	-	○	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	R.L.						
6	14D40-0002	調 片	キトクフクシカ	6	2.32	0.91	0.64	1.28	-	-	-	○	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	R.L.	F				
7	14D41-0002	調 片	砂 岩	7	31.60	27.10	12.60	8.46	1	-	-	○	2	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8	12D82-0001	石 核	安 山 岩 A	8	43.10	60.40	24.10	48.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

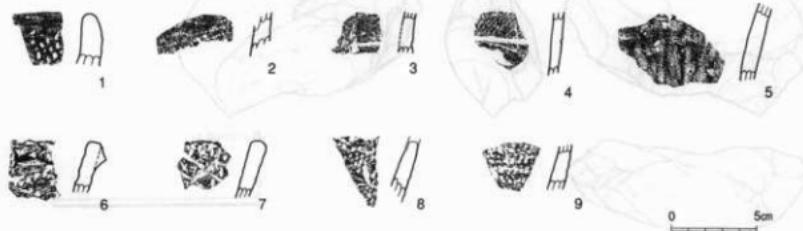
2 繩文時代

縩文時代の遺構は検出されなかった。遺物は調査区の全域から散漫に土器が極少量検出された。

（1）遺物（第6図、図版4）

1・2は早期の土器である。1は外削ぎ状の断面形態で、口縁部付近は無文である。口縁部下には節の大きな撚糸文が施文されているが、ナデ調整が加わり半分程度磨り消されている。口縁部付近及び内面は丁寧にナデ調整され、器面は平滑である。色調は灰褐色で、胎土には砂粒を少量含む。早期の撚糸文土器である稻荷台式に比定される。2は格条体压痕文を横位に、疎らに施文している。胎土には中砂粒を多く含み、器表面はざらつく。色調は外面が暗褐色、内面が暗褐色～黒褐色である。早期子母口式～野島式古段階に相当する。

3～9は後期の土器である。3・4は加曾利B式の精製土器である。3は沈線のみ、4は沈線と縄文が確認できる。器表面に摩耗が見られ、詳細は不明である。5は無文の胴部片である。加曾利B式精製深鉢



第6図 縩文土器

の底部近くで、無文の部分と思われる。内外面共にナデの後、縦方向のケズリが施されている。胎土には細砂粒をやや多く含む。6・7は加曾利B式の粗製深鉢である。6は口縁部に紐縞文が貼付される。7は粗い擦りの繩文地上に斜沈線が施文される。8・9は繩文のみが施文されている。特定型式への帰属は困難である。

3 中・近世

(1) 遺構

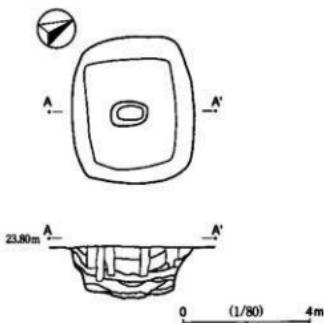
本遺跡の中世以降の遺構は、土坑1基、溝1条である。これらの遺構は、明確に伴出する土器等がなく時期を確定できるものが少ない。それぞれの遺構は、調査区中央部北寄りに検出されている。

S K002 (第7図、図版2)

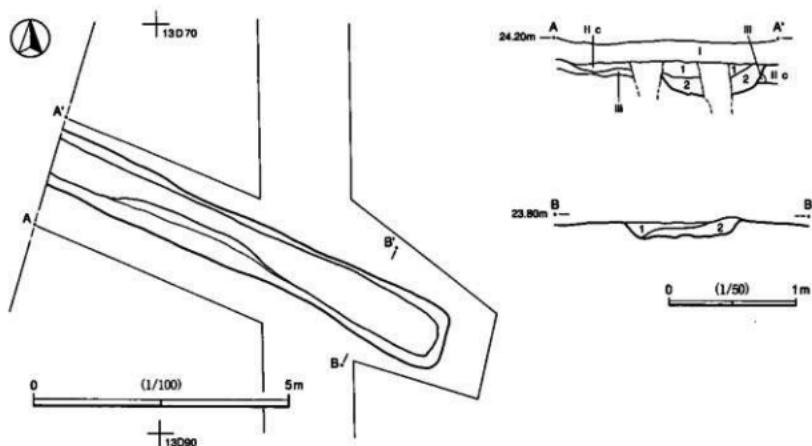
調査区中央部北寄り、14D15・16・25・26区に位置する。北側にS D001が約13m離れて存在する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.3m、短軸1.9m、深さ0.8mを測る。底面は平面形が長方形を呈し平坦である。壁は垂直近くに急角度に立ち上がり、上部で緩やかに広がる。底面中央部には横方向に長い不整長方形の浅い小ピットがある。規模は長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。覆土は上層～中層にかけてローム粒が多くなる暗褐色土で、中層～下層にローム土・ロームブロックが主体の黄褐色土が入り、下層は焼土・炭化物が多い暗褐色土が入り、最下層は炭化物が主体で焼土・焼土粒子が多量に入る黒褐色土が堆積する。いわゆる炭焼窯と思われる。遺物は出土しなかったが遺構周辺からは近世の陶磁器が出土しており、当該期の所産と思われる。

S D001 (第8図、図版2)

調査区中央部北側、13C79・89区から13D82区にかけて位置する。長さ8.5m、幅1.0m～12mのほぼ西北西から東南東方向に延びる溝である。東側で浅くなり確認されなくなるが、調査区西端では調査区外に連続して延びている。横断面形はU字状～コの字状となり底面が平坦な形状を呈する。現存の深さは約30cm～10cmである。覆土は、上層がローム粒の少ない暗褐色土で、下層はローム粒・ロームブロックを多く含む褐色土が堆積する。時期を特定するような遺物は検出されていないが、陶器片が2点検出されている。遺構周辺からは近世の陶磁器が出土しており、当該期の所産と思われる。



第7図 S K002



第8図 S D001

(2) 遺物

① 陶磁器（第9図1～10, 図版4）

1は磁器の小碗蓋である。全体の1/6が遺存し、推定口径9cm、推定底径3.7cm、器高約2.7cmである。内面は底部に細二条と口縁部に太・細二条の円文が廻り、外面は環状のつまみ部から端部にかけて菊花弁状の文様が染付によって描かれる。2は磁器の碗と思われる破片である。小片のため推定寸法は不明であるが部位は高台の一部である。外面高台脇には染付の円文が廻る。底部内面にも染付が確認できるが、文様は不明である。高台端部が変色している。今回掲載した他の磁器に比べ染付の色はやや薄く浅葱色かかった色調を呈している。3は器形不明の磁器片である。小片のため推定寸法は不明であるが、部位は高台に近い体部片である。内面に円文、外面に唐草文の染付の一部が確認できる。4は磁器の小碗である。外面にデザイン化された小菊文様と松文様、「寿」の文字が藍色で印判される。5は陶器の湯飲みまたは杯と思われる小片である。高台径は推定で3.4cm。底部内面には廻る馬が貼付文様で立体的に表され、全体に透明な釉薬がかかる。胎土は細かい黒粒が均一に広がる。貼付けられた文様部分には、胎土とは異なる土を使用し、白色に仕上げ、透明釉越しに胎土の黒い斑点が顕著な他の部分との対比を狙っている。6・7は陶器の灯明皿である。返りまでの内寸は推定で5.0cm～6.0cm器高は1.4cm～1.7cm程度である。胎土は白褐色で、内面及び口縁外面までは茶色の釉薬が施される。8は擂り鉢の体部片である。小片のため推定寸法は不明。胎土は白色の石粒を含む橙褐色、焼成は良好である。9は急須の濃し部分片である。万古土のような細かい胎土で、全体に薄く作られ、内面には成形時の布目が残る。串状の工具によって外側から孔が空けられている。10は焙烙である推定口径25cm、器高2.8cmとやや扁平な器形を呈す。色調は土師器色で内面は煤けたためか表面が黒色に変化している。胎土は密で焼成は良好である。

② 鉄製品・青銅製品（第9図11・12, 図版4）

11は鉄製品である。残存長10.7cm、断面形は幅0.7cm、厚さ約0.4cmの長方形を呈す。鎌のような鉄製工具

の茎部分と思われる。12は青銅製の煙管の吸口である。厚さ約1mmの銅板を巻き込んで筒状に作られている。

③ 土製品（第9図13, 図版4）

13は泥面である。長さ2.0cm, 幅1.7cmである。色調は明褐色、胎土は密で焼成は良好である。翁の顔を表す。

④ 銭貨（第9図14, 図版4）

14は寛永通宝である。縁外径2.3cm, 縁内径1.9cm, 縁厚0.12cmを呈す。裏面は無文である。



第9図 近世遺物

III まとめ

旧石器時代 本遺跡からは、4か所の単独出土地点とその内の1か所で旧石器時代の焼土跡が検出された。それぞれの単独出土地点は出土資料が少ないので明確な様相を把握できないが、後期旧石器時代初期から断続的に旧石器時代人の営みが確認されたということができる。ここでは、単独出土1で確認された焼土跡についての性格と評価を考えてみたい。

旧石器時代の人为的遺構の判断については多岐にわたる複雑な問題があるので詳述しないが、ここでは2つの側面からこの焼土跡について考えてみよう。まず1つの側面はその遺構が人为的に構築されたものであるか否かという点である。本遺跡で検出された焼土跡は、人为的に明確な掘り込みは確認されていない。ただしローム土の赤化範囲が平面形円形で断面皿状の形状を示すことから、ある平坦な面で1か所に集中して火を燃やしたという人为的な焼成行為が推察される。自然営力の野火による木材の焼成では、断面が皿状になるというようなローム土の集中した赤化は考えにくい。また、縄文時代以降の焼土跡の諸例でも、掘り込みをもたない簡易的な地床炉（焼土跡）と考えられる例は多くあり、焼土跡という遺構の性格上、掘り込みという人为的な構築方法によるかどうかで遺構かどうかの判断は困難である。上記の推察から、この焼土跡は人为的な構築による遺構ではないが、人为的な活動痕跡による遺構の可能性が高いと考える。もう1つの側面はその遺構に人为的な遺物が共伴するか否かという点である。この焼土跡では、単独出土の石器（U剥片）が約2.3m離れた距離から検出され、焼土跡に近接した周囲からは石器等は検出されていない。この点からは共伴性は確実視できない。しかし、やや距離が離れているとはいえば同一の層位で、近くから石器が出土していることから全く無関係に焼土跡と石器が残されたとは考えづらく、確率的には共伴した可能性が高いと考える。このように2つの側面からのアプローチにより、本遺跡で検出された焼土跡は人为的な遺構と積極的に評価されると考える。調査区南端で検出されたため周辺の活動痕跡の状況は分からぬが、この場所においては、旧石器時代人の活動は短期間・小規模なものでしかなかったのであろう。

縄文時代 本遺跡からは縄文時代の遺構は検出されなかつたが、早期の撚糸文土器の稻荷台式、条痕文土器の子母口式～野鳥式と後期の加曾利B式の土器が散漫に極少量検出された。周辺遺跡の泉遺跡では、早期の炉穴と該期の土器が検出されており、南西ヶ作遺跡では加曾利B式の土器がまとまっている。両遺跡とも本遺跡西側の河川に開拓された台地縁辺部にあたり本遺跡が同一台地上の奥まった面に立地することから考えると、早期・後期の縄文人の生活の中心域は遺跡の西側に広がることが予想される。本遺跡はその周辺域にあたり出土土器量の少なさからも限定された活動により遺跡が形成されたと考えられる。

中・近世 本遺跡からは近世の溝1条と炭焼窯1基が検出された。両遺構の時期を限定する遺物は共伴していないが、両遺構の周囲からは近世後期～明治初期（18世紀後半）の陶磁器が検出されており当該期の時期の壇然性が高いと考える。遺跡の北西側には割野野馬土手、東側にはコの字状の土手が確認され、捕込や居住区画の土塁と考えられる天王脇野馬土手が存在する。このことから本遺跡の周辺は印西牧を構成する地域の一部にあたることが考えられる。印西牧内の新田開発は享保年間に活発化し明治初期まで統いたことが知られており、本遺跡で検出された遺構、遺物もこうした状況と無関係ではないだろう。

写 真 図 版

東村田町の原図地形 (S=1/10,000)



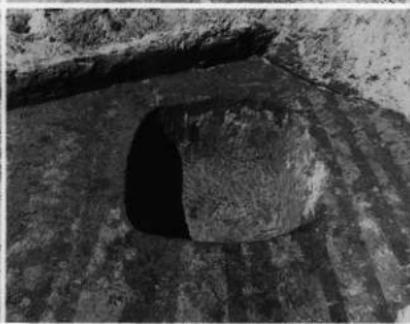
単独出土 1 (南から)



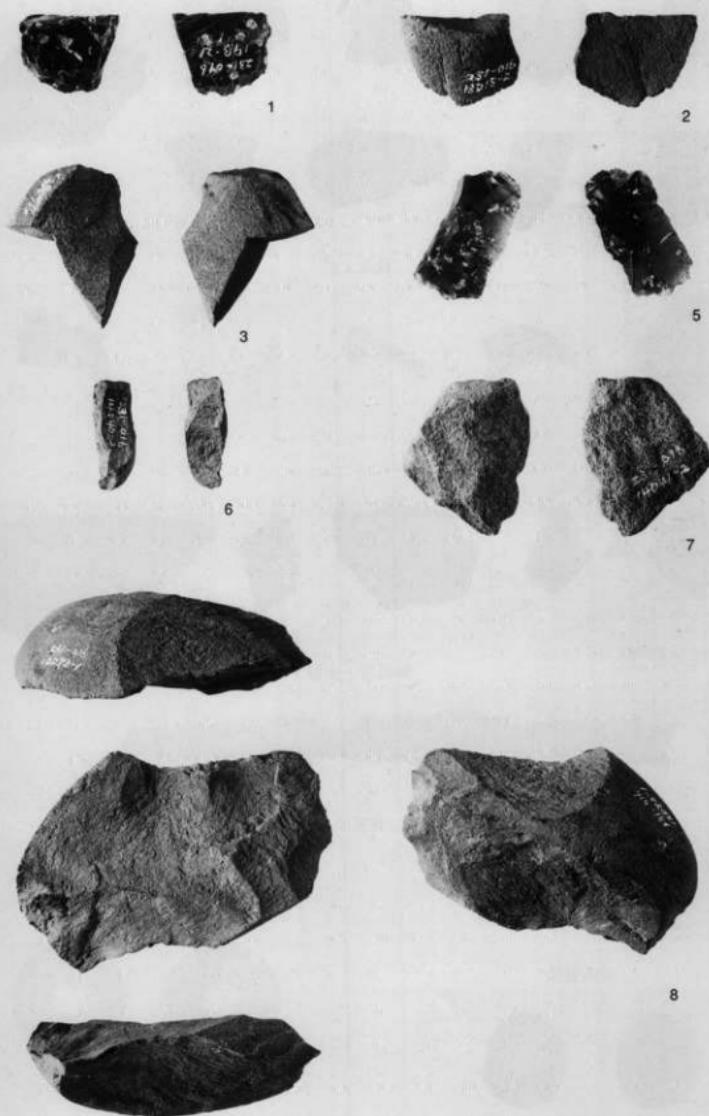
基本土層 (左)
旧石器時代焼土跡 (右)



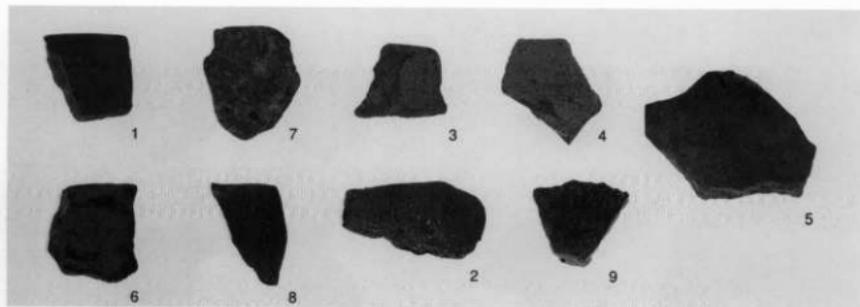
単独出土 2 (左)
単独出土 3 (右)



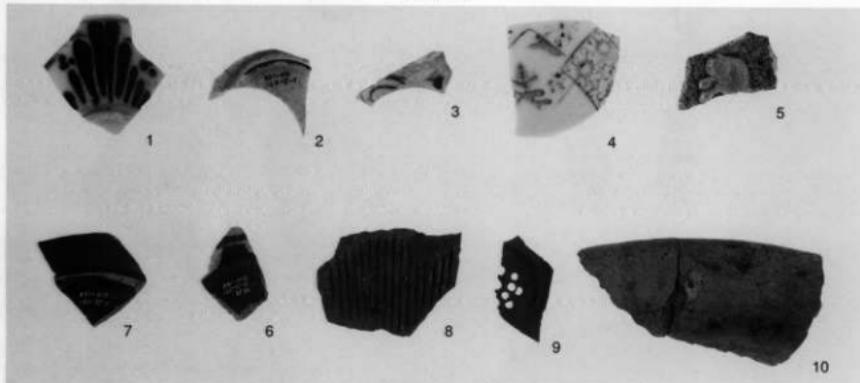
S D001 (東から)
S K002 (東から)



旧石器時代石器



縄文土器



陶磁器・土器



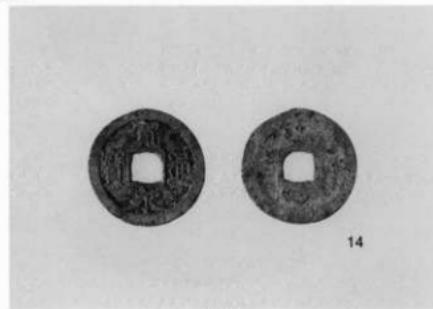
鉄製品



青銅製品



土製品



錢貨

報告書抄録

ふりがな	しゅようちはうどうちらばりゅうがさきせんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	主要地方道千葉電ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書							
副書名	印西市東泉新田南遺跡							
巻次								
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第494集							
編著者名	矢本節朗、小笠原永隆、立和名明美、岡田誠造							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 電話 043-422-8811							
発行年月日	西暦 2004年 3月 25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
東泉新田南	千葉県 印西市草深字天宇塚 1119-25ほか	12231	35 度 48 分 23 秒	140 度 08 分 00 秒	20020902～ 20021031 20030303～ 20030326 20031201～ 20031211	6,494.52	県道千葉電ヶ崎 線建設事業に伴 う埋蔵文化財調 査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東泉新田南	包蔵地	旧石器時代	焼土跡	1基	模形石器	X層から検出された焼土跡。		
		縄文時代			船荷台式土器、子母口式～野島式土器、加曾利B式土器			
		中・近世	土坑 溝	1基	陶磁器、土製品、寛永通寶			

千葉県文化財センター調査報告第494集

主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書
-印西市東泉新田南遺跡-

平成16年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 千葉県企業庁

印西市船尾1447-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2
印 刷 株式会社 エリート印刷
成田市並木町44-20
